関西自然保護機構会報 18(2)：77－78，1996

巻頭言

帰化鳥は悲しからずや
異郷の風土にも馴染まず漂う

大阪市立大学理学部生物学科　山　岸　　哲

外国からやってきた鳥を「帰化鳥」と呼んでしまうならば，ガラパゴス諸島やハワイ諸島の鳥たちはすべてが帰化鳥だということになるし，私が現在取り組んでいるマダガスカル島固有科のオオハシモズ類14種も2,000万～1,500万年前にアフリカからやってきて帰化したヤブモズかカブトモズの末裔だということになってしまう。『広辞苑』によると「帰化」とは，生物については「人間の媒介で渡来した生物が，その土地の気候・風土になじみ，自生・繁殖するようになること」とある。だから「人間の媒介」と「自生・繁殖」というのが帰化を定義するキーワードになる。

移動力の弱い動物や自力で海を渡ることがむずかしい動物が通常の分布域の外側で見つかった場合には，それが意識的にしろ，そうでないにしろ，人によって運ばれた可能性がきわめて強い。ところが，鳥類は翼をもち卓越した移動力をもっている。たとえば，キョクアジサシなどは，１年のうちに北極と南極の間を３万キロも楽に移動する能力をもっている。したがって，それまで見られなかった鳥が「人間の媒介によらず」に新しい土地の気候・風土になじみ繁殖することがごく普通におきる。

北からと，南からの例を一つずつ上げてみよう。カンムリカイツブリは従来は寒帯や亜寒帯で繁殖し，冬鳥として我国に飛来していたが，青森県一柳沼では1972年より，琵琶湖では1991年より繁殖が確認されるようになって，１年中留まるものが現れた。逆に，本来は熱帯や亜熱帯に分布していたヒメアマツバメは1960年代以降，関東以西の太平洋岸で局地的に繁殖を始め，周年留まって生活するようになった。こうした鳥たちを誰も「帰化鳥」と呼ばないのは，人間が飼育したり，運び入れたとは常識ではとても考えられないからである。

さて，正真正銘の帰化鳥といわれているものは二つに大別できるようだ。一つは狩猟や学術研究を目的として，積極的に放鳥されたものであり，好例としては「チョットコイ・チョットコイ」の鳴き声で親しまれているコジュケイがある。この鳥は今では北海道及び東北や中国地方の日本海側に面する積雪量の多い地域を除いて本州各地に住み着いて増殖し，優良な狩猟鳥の地位を占めるようになっている。コジュケイは1919年(大正８年)に，東京の岩崎俊弥という実業家が中国より10羽ほど輸入し，赤坂にあった自分の庭園に放して繁殖をさせたのが始まりだといわれている。このように「運び人」がほぼはっきりしている場合は，まず帰化鳥だと言い切ることができよう。

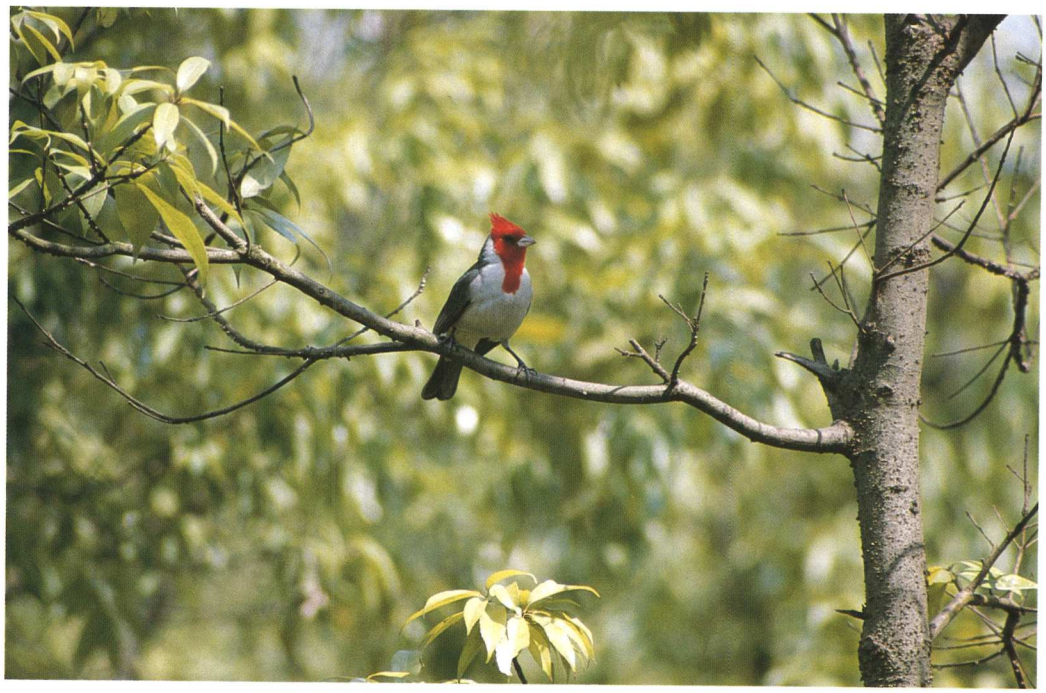
もう一つはペットとして飼育していたものが逃げ出して野生化した場合である(いわゆる籠抜け)。ひどい場合には，業者が飼育しきれずに野外に大量投棄した疑いがあるものさえある。ペットの野生化の例としては，東京の「山の手」地域に1969年頃から数100羽の規模で住み着いて帰化したワカケホンセイインコが有名だ。

帰化鳥に詳しい日本野鳥の会研究センターの成末雅恵さんによると，昭和半ばの高度経済成長期には，飼い鳥として多数の外国産鳥類が輸入され，

1977年には少なくとも300万羽以上の鳥類が鳥類商を介して日本国内へ持ち込まれたという。こうした外国産鳥類の一部が飼育者の不注意から逃げ出したり，あるいは故意に捨てられたりして帰化のきっかけが与えられる。彼女の調べでは，1961年から20年間に約80種の外国産鳥類が，東京周辺の野外で目撃され，このうち20種は1回以上の繁殖が確認されたそうだ。

しかし，理由はまだはっきりしないが，それらの籠抜け鳥の多くはうまくいったとしても一時的に繁殖するだけで，長期に野外で個体群を維持するには至っていない。つまり幸か不幸か，その土地の気候・風土になじむところまでいっていないのだ。私も，大阪府の大泉緑地で，繁殖しかけたが結局は失敗に終わった，南米産のコウカンチョウを観察したことがある（写真参照）。ただし他地域では，この鳥が繁殖に成功したとも聞く。こうなると，どこで何年間繁殖に成功したら「帰化した」と言えるのか判断がむずかしい。

托卵鳥であるテンニンチョウが我国で籠を抜けても繁殖できないのは，原産地で宿主にしているカエデチョウが不在であるからだ。このような馬鹿らしい例は別にして，どんな鳥類が，どのような理由で帰化に成功したり，あるいは逆に失敗するのかは，生態学上の大きな問題であるにもかかわらず，その研究は緒についたばかりである。中でも，本シンポジウムでも講演された，ソウシチョウは我国の帰化鳥の中では，もっとも詳しく複数の研究者によって調査され始めた鳥である。従来から存在した鳥類群集の中で，この帰化鳥が果たす役割にまで研究の手は伸びようとしており，これからの成果が大いに期待されるところだ。



堺市大泉緑地のアラカシの樹上で1979年4月に繁殖を試みた南米産のコウカンチョウ．しかし，このエトランゼの繁殖も失敗に終わった．